

週日の説教

金 大烈 神父 2009年10月30日(金)

《福音的な柔軟性》

律法の世界では、安息日に治療することを禁止してはいませんでした。しかしファリサイ派の人々は、治療することに反対でした。なぜならば、そのようにするほうが、更に徹底的に律法を守ることになると思ったからです。しかしイエスは、そのような考え方をしているファリサイ派や律法学者達に「もし安息日に、あなたの息子が牛が井戸に落ちたならば、安息日だからといってそのまま放って置くのか。」と聞きます。すると「ファリサイ派の人々は何も答えることができなかった」と今日の聖書では伝えています。

ある人が、「金」がものすごく欲しくて「金」を売っている店に行きました。そこで気に入った「金」を見つけ、何も言わずにその「金」を持って店を出ようとしていました。それを見て、店員が驚き「お客様、なぜ金を盗もうとしているのでしょうか。」と聞きました。それを聞いたその人は、自分でも驚き「私には金しか見えませんでした。」と答えました。

この話は、「律法だけを見ようとする人には律法だけが見え、人も神様も見えなくなる」ということを言っています。木だけを見ようとするれば、森が見えなくなるのと同じことです。

今日の福音(ルカ 14:1-6)をとおして、もう一回考えてみたいのは、生き方の柔軟性です。体も柔軟性がなくなれば、骨が折れてしまいますね。人の生き方も同じです。人と係わってみると、その人の心が柔軟か、それとも頑なで自分の人生をいつも厳しく見ているかが、すぐに分かります。ものすごく苦勞をしてもいつも笑顔を浮かべている人がいます。その人の心には、たぶん柔軟性があるのでしょうか。もちろん、柔軟性があり過ぎてもめっちゃくちゃな生き方になってしまいます。秩序がなくなります。私たちは、柔軟性を考えるとき、いつも基準としてキリストの愛を意識しなければならないと思います。キリストの愛は、必ず私たちにもっと広い心、もっと幅広いかわりを要求します。それが、柔軟性です。この人は罪人だと思って攻める前に、その人の犯した罪が、自分の中にもあるのではないかと自分を振り返ってみるのが柔軟な心と言えるでしょう。

皆様、今日の福音は面白い話です。このファリサイ派や律法学者達が見せている振る舞い、考え方は、私たちの心の中にもあるかもしれません。「これは青だ」と思ったときに、別の人が「これは赤だ」と言うと、「この人は変ではないか」と思って、その人を責めようとする頑なな心が私たち全ての人にあると思います。

ですから、今日の福音をとおしてもう一回考えてみましょう。

何かがあったとき、そのあったものもとの精神を忘れないようにしましょう。そして、その忘れない心を保ちながら、「私たちの生活や心にも福音的な柔軟性をいつも求めなければならない」ともう一回考えてみましょう。

ありがとうございました。